

化学委員会 材料化学・分析化学分科会
(第 26 期・第 9 回)

議 事 要 旨

日 時：令和 8 年 7 月 27 日（月） 13：00－14：10

場 所：オンライン会議（Zoom）

出席者（敬称略）：17 名

栄長泰明（委員長）、玉田薫（副委員長）、齋藤公児（幹事）、内藤俊雄（幹事）、岡本裕巳、上野祐子、加藤知香、加藤昌子、川崎ナナ、佐藤縁、菅原洋子、関根千津、竹内孝江、竹岡裕子、寺西利治、馬場嘉信、藤本俊幸、宮崎あかね

欠席者（敬称略）：3 名 阿尻雅文、伊藤耕三、山下正廣

議題等：

1. 見解の発出について（報告）

委員長より、無機化学分科会を中心にまとめられた「見解：マテリアル融合：物質・エネルギー・情報技術の融合による新たな元素戦略」（当分科会も共同で提案）についての進捗報告があった。

2. 今期の活動の総括と今後の方向性について

最初に委員長から第 26 期を通じた本分科会の活動の総括と各委員に対する感謝が述べられた後、各出席者より、以下のような意見が出された。

・「材料・分析の統合」という観点

「材料と分析の融合とは何か、長期的視点で方向性を具体的に絞る」、「分析と材料分野間での人的交流が必要」、「両分野を統合するには人材育成と情報の共有が重要」、「分析化学の再定義が必要」といった意見が出された。

・今後検討すべき点

「世界の中での日本の研究の位置付けを知りたい」、「フォーラムも含め

た今期の活動を提言にすべき」、「学術会議としての立場を明確にした方向性を示すべき」といった意見が出された。

また、「学術という視点からの議題選定が必要ではないか」、「できるだけ早急に次世代育成の具体的筋道を示すべき」、「本分科会で議論してきたことを次期分科会に引き継ぎ、提言を目指すべき」、といった意見が出された。

さらに、「学術フォーラムの事前の開催公知の戦略に改善の余地がある」、「次回の学術フォーラムは、よりテーマを絞って実施した方がよい」、「学術会議だからこそできる活動を」、「分野によっては生物系（二部）と化学系（三部）、および産学の連携による新たな価値の創造や人材育成が重要」、「分野間の融合も含めた俯瞰的視点での問題把握と議論が必要」、「この分科会で議論したことを何らかの形に残すべき」、「学術フォーラムは継続すべき」、「産学間での研究の視点の違いを埋める話し合いの場を設けるべき」、「次回のこの分科会の学術フォーラムは JAIMA（一般社団法人 日本分析機器工業会）の中で実施できれば、もっと人が集まるのではないか」、「より大きな分野で集まって議論が必要」といった意見が出された。

そのほか、「分野横断のセッションを学会で企画するなど、段階的にでも本分科会で議論してきた分野の融合を実行に移していくべき」、「日本の研究力の回復には大学教員の時間の確保が課題」、「人材育成の背景に人材流出があるのでは」、「大学教員が研究プロジェクトを立ち上げて、研究と若手育成を先導して欲しい」といった意見も出された。

以上の意見をふまえ、今後の活動に向けた申し送り事項とすることとした。

以上